

はじめに

本書は、男女共同参画社会を目指す中で、英語教育がどのように貢献していくことができるかということを経緯、本書の目的、構成と概要、ジェンダー研究に対する一般的な批判への本書の立場をここに記しておきたい。

1. 英語教科書分析とジェンダー研究

筆者がジェンダーの観点から英語教科書の分析を行うようになったのは、1996年春のことである。ある研究会で、服部幹雄氏（名古屋女子大学教授）の研究発表を拝聴する機会があった。ロビン・レイコフ氏の *Language and Woman's Place* (1975, Harper & Row) を踏まえ、Mrs/Miss/Ms の使用を含め、名前の呼び方における男女差について丁寧なテキスト分析が行われた。私自身が下の名前で呼ばれることが多かったこともあり、衝撃を受けた。ちょうど、英語教科書や英語辞書の記述研究においても、chairperson などの新語や総称用法の単数代名詞をどう扱うかが課題になっているときでもあり、また、上野千鶴子氏らの『きつと変えられる性差別語』（三省堂、1996）や中村桃子氏の『ことばとフェミニズム』（1995、勁草書房）が出版された頃でもあった。

その後、姓名の記載方法、敬称や職種名称の使用、総称名詞や総称代名詞の使用などを中心に、英語教科書や英語辞書の分析を行ってきた。一般的テキストとの比較を行うために、論文、新聞、映画などさまざまなジャンルの英語も調査した。2003年には、博士論文として、「フェミニズム言語学の視点に基づく英語性差別表現：コーパスに見るその現状と今後の展望—職種名称・総称・敬称を中心に—」をまとめた。さらに、英語だけではなく、日本語の現状も確認しておきたいと考え、日本語の教科書、辞書、新聞の調査も行ってきた。

ほぼ四半世紀が過ぎ、教科書の分析については、一通りの調査を終えたつもりであった。しかし、近年、学生にインタビューを行う中で、これまでの調査研究に抜け落ちていたものがあったことに気が付いた。教科書にどのような話が出てきたか、どのような単語が使用されていたかは覚えていないが、そこに出ていた挿絵や写真は記憶に残っているというコメントが多く出てきたのである。これは、筆者が研究手法の拠り所としてきたコーパス言語学の欠点でもあるわけだが、これまで、テキストのみを研究の対象とし、挿絵や写真などは「添え物」として、捨象していた。しかし、英語教科書におけるジェンダー問題を考えていくなれば、挿絵や写真も分析対象とするべきであろう。

ところが、実際に、教科書の画像を分析するためにデータベースを調べてみて、驚愕した。英語教科書のテキストのデータベースは数多く存在し、分析調査もなされているのに、挿絵や写真のデータベースはまったく存在していなかったのである。そこで、2016年度より、科学研究費補助金を得て、中学校英語教科書に記載されたすべての挿絵・写真のデータベースを構築することにした。非常に時間とエネルギーのかかる作業で、研究協力者の助けがなければ成しえない作業であったと思う。本書では、科研プロジェクトで構築した中学校英語教科書の挿絵・写真データベースの一部を第4部で紹介している。

2. 縦横の2方向からの英語教科書研究

現行の中学校英語教科書は、文部科学省の検定制度の下で発行されている。しかし、ジェンダーと英語教育の問題を考える時、我々は、現在の教科書を過去と切り離して考えることはできない。日本の教科書は、戦前にさかのぼる長い歴史を持つからである。そのため、英語教科書の歴史的観点からの分析を専門とする江利川春雄氏には、戦前の英語教科書を男女平等の観点から分析した論文を寄稿いただいた。また、英語教科書研究において題材論の分野を確立し、実際に40年近く中学校英語教科書の作成を担ってこられた森住衛氏には、男女平等の観点から、1970年代以降の英語教科書の題材

の分析を行っていただいた。長期的視点に基づく日本の教科書分析が、本書の教科書研究の縦軸となる。

さらに、日本の英語教科書に対して、より客観的な分析を行うためには、視野を広げ、海外の教科書との比較分析を行う必要がある。特に、文化的背景が似通っているアジア圏内の英語教科書の調査は不可欠と言えよう。海外の教科書研究を行うにあたっては、気鋭の2名の研究者に、研究分担者として科研プロジェクトに参加していただいた。本書では、原隆幸氏が中国の英語教科書の分析を、また、相川真佐夫氏が台湾の英語教科書の分析を、それぞれ男女平等の観点から行っている。海外の現行教科書の分析が、本書の教科書研究の横軸となっている。

3. 教科書研究から産出研究へ、調査対象の拡張

教科書研究が学習者へのインプットの調査であるならば、学習者コーパス研究はアウトプットの調査となる。本書では、アジア圏最大の学習者コーパスである ICNALE を構築している石川慎一郎氏に、日本人大学生の発話における男女差についての論文を寄稿いただいた。これまでも L1 となる母語においては、発話スタイルに男女差があることが報告されてきたが、日本人大学生の L2 となる英語においても、発話スタイルに男女差が見られることが計量的分析によって明らかにされている。

4. 教育から心理学・社会学へ、研究分野の拡張

ジェンダー・ステレオタイプがどのように英語教科書に現れているか、どのように学習者に影響を与えているのかという問題を考える場合には、英語教育をとりまく他の研究分野の知見が不可欠となる。ジェンダー・ステレオタイプは、教師と学習者の心と行動の問題でもあり、学校をとりまく社会の問題でもあるからだ。本書では、心理学分野から、小学校教師のジェンダー・ステレオタイプを扱う矢野円郁氏の論考を、そして、スポーツ報道に見られるジェンダー・ステレオタイプを分析するメディア研究分野からは、小林直美氏とトニー・ブルース氏の論考を収録している。特に、トニー・ブ

ルース氏には、本書のプロジェクト全般にわたって温かい助言をいただいた。社会におけるジェンダー表象の問題に取り組む同志として、海を越え、大きな勇気をいただいた。異なる分野の研究者が連携することの意義を改めて強く感じている。

5. 5つの批判に対する本書の解

「ジェンダーと英語教育」の研究においては、しばしば以下のような批判が聞かれる。

- ① 英語教科書はそれぞれの地域の現実を描くべきである。現実と異なる状況を描いた教科書は、不自然で、わかりにくいものになる。
- ② 研究の目的がはっきりとしない。批判だけでなく、教科書が目指すべき方向性を明確に提示するべきである。
- ③ 主観的な調査・分析に基づいて、政治的な主張を唱えることに終始している。学問とは呼べない。
- ④ 教科書を書き換えても、実際に社会を変えていくことにはつながらない。より重要な他のジェンダーの問題に目を向けるべきである。
- ⑤ 「ジェンダー」という語を使用しているが、LGBTQなどの多様な性に対する視点が欠如している。

本書はこれらの批判に対して、以下のように答えたい。

- ① 教科書は、学校という「権威」の中で使用される。一般に、教科書には、「正しい」または「標準的な」考え方や生き方が提示されていると考えられている。男性のパイロットが多いからと言って、男性パイロットだけを描くならば、「パイロットは男性」という固定観念が刷り込まれ、女子の人生選択の幅が狭められる可能性がある。教科書は、現実を映す鏡であると同時に、生徒に考え方や生き方を示す鑑でもある。
- ② 男女共同参画社会の推進を目的とした場合、あらゆる場面で男女が均等に描かれ、ステレオタイプが生じないようにすることが望ましい。しかしながら、現実社会において、すでに、パイロットは男性、受付案

内は女性といったジェンダー・ステレオタイプが刷り込まれている場合には、男女を平等に描写するだけではステレオタイプの払拭は難しい。石川（2017）「学校教科書に見るジェンダー表象 —量的研究と質的研究の融合—」では、教科書には、一般的なジェンダー・ステレオタイプとは異なる性の表象を行うという、SIM（Stereotype Inversion Model）を提唱した。

ここで、本書のカバーイラストを見ていただきたい。もし、読者が違和感を覚えられたのであれば、それは、SIM 効果であると言えよう。当初、「ジェンダーと英語教育」というタイトルから、本書のカバーイラストには、男性と思しき背の高い人物と、女性と思しき小柄な人物が見つめ合うイラストが提案された。男性は女性を見下ろし、女性は男性を見上げていた。そこで、2人の首から上のみを入れ替えていただくようお願いした。その結果、肩幅が広く背が高い女性に、背が低く細身の男性がそっと腕を絡ませ寄り添いながら、それぞれが、自分の興味に合わせて、異なる方向を見つめているという構図になった。背が高い女性もいれば、背が低い男性もいる。ところが、「逆」になったイラストを見るまで、我々は、自分の中のジェンダー・ステレオタイプに気付くことができないでいるのだ。SIM は生徒の「気付き」を促すツールになると考えている。

- ③ ジェンダーの観点からの教科書分析、特に、挿絵・写真の分析においては、主観による印象論であるとの批判も少なくない。科研プロジェクトでは、できるだけ、客観的なデータを収集することを目指した。男女複数の大学生が研究協力者となり、ETID（English Textbook Illustration Database）プロジェクトと名付けた作業において、共通プロトコルに従って、挿絵・写真の描写説明を行うことで、画像をテキスト化していった。データ構築の詳細は第1章に譲るが、誰が行っても同じ分析結果が得られるように、客観的なデータベースの構築を行っている。
- ④ 国際連合は、2030年までに人類が達成すべき目標として、SDGs

(Sustainable Development Goals「持続可能な開発目標」)を設定している。SDGsとして挙げられている17の目標のうち、gender equalityとempowerment of women and girlsは、5番目の目標とされる。4番目の目標となるquality educationとともに、教育における男女平等は、我々の社会を持続可能にするために取り組まねばならない課題とされている。教科書における男女平等は、決して、空理空論ではない。

- ⑤ LGBTQなどの多様な性のあり方が広く認識されるようになった。男女平等や女性の地位向上の推進を考える中で、こうした視点が欠けているという指摘は、謙虚に受け止めたい。残念ながら、本書では取り扱うことができなかったが、今後は、すべての人が人らしく生きることができる社会、自分の意思で選択を行い、それぞれの可能性を実現できる社会の構築に向けて、英語教育が貢献できることを考え続けていきたい。

最後になったが、科研プロジェクトの研究分担者の先生方をはじめ、本書の趣旨に賛同いただき、玉稿をご寄稿いただいた先生方に、厚く御礼申し上げます。また、出版事情の厳しい状況において、本書の意義を認め、出版を快諾して下さった株式会社大学教育出版代表取締役の佐藤守氏に心より感謝を申し上げます。教科書のテキストコーパスの作成や挿絵・写真のデータベースの作成に協力してくれた学生の皆さん、アンケートに協力してくれた学生の皆さんにもこの場を借りて感謝を述べたい。

2020年3月27日

編者 石川 有香

ジェンダーと英語教育
—学際的アプローチ—

目 次

第1部 男女共同参画社会を推進する観点からの英語教科書の分析研究

1. 日本の中学校英語教科書に見る女性表象
— 男女共同参画社会を目指した英語教材研究 — ……………石川有香…1
2. 中国の教科書に見られる性の平等性
— 中学校の英語教科書を中心に — ……………原 隆幸…44
3. 台湾の中学校英語教科書にみられるジェンダー表象の実態調査
— 挿絵・写真におけるイメージを通して — ……………相川真佐夫…68

第2部 英語教育学・英語学の観点から考えるジェンダー

4. 日本の中高の英語教科書に見られるジェンダー問題を考える
— 題材の横断的・時系列的調査の試みを通して — …… 森住 衛…81
5. 戦前期日本の英語教科書はジェンダーをどう扱ってきたか
……………江利川春雄…118
6. Gender Differences in L2 English Persuasion Role-Plays:
A Study Based on the ICNALE Spoken Dialogue
……………Shin'ichiro Ishikawa…130

第3部 周辺分野(心理学・メディア研究)から考えるジェンダー

7. 教育者のジェンダー・ステレオタイプの実態とその影響
—ステレオタイプの再生産を防止するために— …… 矢野 円都…153
8. リオオリンピックニュースにおけるジェンダー
—内容分析によるジェンダー・バイアスの解明に向けて— … 小林 直美…166
9. Rethinking Ways to Analyze and Influence Gender Representations
in Media Texts …… Toni Bruce…188

第4部 男女共同参画社会を目指した英語教科書分析の資料

- 資料について ……214
- New Crown English Series I ……215
- New Horizon English Course I ……239